



会議レポート

ACM SIGUCCS 2015 参加報告

— Make Your Sun Shine —



ACM の The Special Interest Group on University and College Computing Services (SIGUCCS) は、高等教育機関の ICT 基盤の利用者支援や管理・運用に関するさまざまな業務に携わる人々の集まりであり、2015 年で創立 52 周年を迎えた。かつて発行されていた News Letters は現在発行されていないが、1973 年以降、毎年秋に定例会議が行われているほか、SIGUCCS 活動に貢献した個人への表彰、優秀な広報活動を行った ICT 支援機関に対する表彰、メーリングリストによる意見交換などが行われている。2015 年 11 月にアメリカのフロリダ州 St. Petersburg で開催された SIGUCCS の定例会議である SIGUCCS 2015 に参加したので報告する。

会議の概要

SIGUCCS の会議は、実務担当者の発表が中心の“Service and Support Conference (S&S)”，最高情報責任者 (CIO) 等の経営担当者による議論が中心の“Management Symposium (MS)”，追加参加料が必要な“Pre-Conference Seminar”，企業展示、賞の授賞式、招待講演、Gala (お楽しみ会) など構成されている。今回の第 43 回目の SIGUCCS 定例会議は、参加者が、日照時間が長い St. Petersburg で学び育ち、参加者が大学の光になることを願って“Make Your Sun Shine”をキャッチフレーズに開催され、およそ 220 名が参加した。S&S では 23 件の一般発表、6 件のポスター発表、5 件の Lightning Talk が行われた。MS では 14 件の分科会が開催された。このほか、S&S と MS の合同で Round Robin Session と名付けられた意見交換会が開催された。S&S の発表については Proceedings が発行され、その発表論文は ACM Digital Library に収録されている。2015 年の正式な投稿数の発表はまだないが、図-1 に 2014 年以前の、S&S への論文投稿数と受理された論文数を示す。2014 年は 1 件あたりの発表時間が

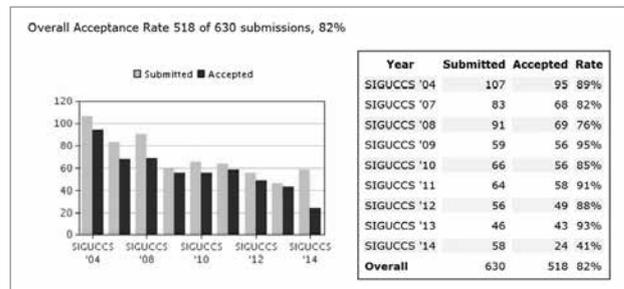


図-1 SIGUCCS Conference の投稿数と受理率の推移^{☆1}



図-2 Service and Support Conference 一般発表の様子

延び、発表可能件数が減ったために、採択率が減少した。SIGUCCS の幹部によると、毎年実行委員会の意向によってプログラム編成の方針も変わっているとのことであった。

論文投稿から会議開催まで

SIGUCCS の論文投稿は 150 語から 250 語の提案書の提出から始まる。今回の S&S では次の 4 分野について募集があった。

1. Service Development and Management
2. Leadership and Career Development
3. Instructional Support and Class Technology
4. Training, Documentation and Communication

提案書が受理されると、論文を投稿するが、SIGUCCS では投稿された論文について、数回にわたって、懇切丁寧なアドバイス (添削) が示される。論文を書きなれていない実務担当者が多いためこのような支援があるのではないかと思われる。Reviewer (以前は mentor と呼んでいた) の苦勞に毎回感謝している。

Service and Support Conference (S&S)

今回の S&S の一般発表では、Windows 10 や Windows To Goなどを大学で使うためのノウハウ、端末の保守管理に関する話題、ソフトウェアのパッチの集中管理に関する効果、ヘルプデスクやサポートの労力を低減するための工夫、教員への ICT 利用支援に関する話題、学生アルバイトの管理に関する話題、Google のサービスの利用に関する話題等の発表が行われた。

発表の様子を図-2 に示す。SIGUCCS では講演者が講

☆1 <http://dl.acm.org/citation.cfm?id=2815546>



図-3 ポスター発表と Lightning Talks Sessionの様子

演の途中で聴衆に質問を投げかけ、発表者と聴衆が意見を交換しながら講演が活発に進んでいく発表が多い。

筆者が興味を持った発表として、Colgate UniversityのICT Services部門のServedio氏とBeers氏による“Who says you can't go home?”があった。2005年より学内ITのサポートデスク業務を業者へアウトソーシングした。その結果、学内スタッフとのコミュニケーションがサイロ化され、スキルセットが分断され、教職員・学生からの要望に迅速に応えられなくなったそうである。金額の割にはパスワード変更など限定された業務しか依頼できないことから、2015年にアウトソーシングを打ち切りIn Houseに戻したとのことであった。

ポスター発表6件のうち3件は日本からの発表で、うち1件は大学院生の発表であった。企業展示と同じ会場で、アイスクリームを食べながらポスター発表を聞くことができるようになっていた。

Lightning Talks Sessionは今年から始まった新しい試みで、1人あたり発表8分、質疑応答2分の発表が5件連続して行われた。日本からも1件の発表があった。分野の異なる、気軽に聞ける複数の発表が1つのセッションに入っていたためか、多くの聴衆が集まり、盛り上がっていた。図-3にポスター発表とLightning Talks Sessionの日本からの参加者の発表の様子を示す。

投稿時にポスター発表やLightning Talkを希望することもできたが、通常のセッションとポスターとLightning Talkの割り振りは著者の希望よりも、どの発表形態が一番適しているかで判断されている印象が強い。

Round Robin Session

Round Robin Sessionは、大学のICT基盤運用・管理の場面で話題になっている多くの課題について、それぞれのテーブルに分かれて参加者が議論や意見交換を行うものである。10分ごとに、テーブルを移動することができる。Cyber Securityのテーブルでは、結局、学生や教職員が全然注意してくれないから駄目だね、ということで盛り上



図-4 招待講演

がっていた。Video Conferenceのテーブルではさまざまな製品について、参加者同士が各自の経験を踏まえて比較を行っていた。Microsoft社のシステム管理ツールであるSCCMのテーブルでは、管理運営にとっても良いという話が出たのに対して、高価ではないか?との質問については無料で使う方法がある、というような意見交換が行われた。

Management Symposium (MS)

2010年まではMSとS&Sは春と秋に別々に開催されていたが、2011年から秋にまとめて開催されるようになった。その後も、日程が短縮されるなど、少しずつ開催形態が変化している。S&Sは以前からユーザを相手にする現場の職員が多いという印象であったが、MSの出席者はCIOクラスの人が多い(スーツやジャケット着用の人が多い)という印象を受けた。発表や議論の内容も経営者の視点のものが多くようであった。

その他の発表や行事

S&Sの開会式、Managementの開会式、S&Sの閉会式でSIGUCCSの現状報告、3件の招待講演、各種授賞式が行われた。現状報告の中で、本会IOT研究会が中心になって進めていたSIGUCCS東京支部の設立にも言及があった。図-4に招待講演の様子を示す。なお、2005年と2008年には日本の情報倫理ビデオがCommunication Awardsを受賞している。このほか、初めての参加者に対するオリエンテーション、会場の近くにあるグリ美術館を借り切ったGalaなどが行われた。

全体の印象

SIGUCCSはみんなで協力してICT基盤の利用者支援や管理・運営を良くしていこうという雰囲気溢れている。これらの実務担当者やCIOの研修の場としての機能も大きい。発表についてはTechnology Entertainment Design (TED)のように、非常に訓練された発表が多い。北米も日本も、ICT基盤管理運営担当者は同様の悩みを抱えていることが分かる。日本および世界のICT基盤とその管理運営をより良くするため、今後、日本からの参加者が増加することを期待する。(山之上卓/福山大学、坂下幸徳/Hitachi America, Ltd., 藤村直美、笠原義晃/九州大学)